学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	吉井　祥 【比較社会文化学専攻　平成28年度生】	要　　旨
論 文 題 目	和歌の機能とその変容　―哀傷歌を基軸として―	本論文は、哀傷歌（人の死に関わる歌）を中心として、平安時代の和歌の持つコミュニケーション機能とその変遷を明らかにしようとしたものである。上代においては相聞と並ぶジャンルである挽歌は、平安では哀傷歌の名を与えられ、古今集以下の勅撰集でも常に巻が配当されるが、その実態については恋歌に比べて驚くほど先行研究が少ない。本論文は上代後期から平安前期の哀傷歌を網羅的に調査し、いつ、誰によって、誰に向けて詠まれ、その表現はどのように分類整理できるかを初めてデータ化した。 その結果、上代の挽歌生産はそのまま平安に継承されたわけではなく、特に私的な場での挽歌が定着しないままだったために、公的な葬送儀礼の中での詠歌が消滅していったときに挽歌も衰退したらしいこと、平安時代になり、特に古今集撰者たちの手によって新たに哀傷歌が立ち上げられ、私的な歌のやり取りが以後増加したこと、それによって知人同士の哀傷の共有が広まったことを明らかにした。 次に平安哀傷歌の表現につき、歌を贈る際に対面であるか非対面であるか、他者が遺族に贈るのかといった場面や相手との関係性が表現のタイプを規定するということを明らかにした。さらにそれを通時的に分析し、当初はただ哀傷の念を表白するものが多かったのが、次第に相手（遺族）を思いやる表現スタイルが確立されたことを明らかにした。 哀傷歌が挽歌の単なる継続でないこと、その表現の場にもタイプにも歴史的変遷があったことなどは、論者が全く初めて明らかにしたことであり、極めて価値の高い発見である。 論者はさらに平安前期までの和歌の贈答全体の形成史を対象化し、前の歌に「和する」タイプと「切り返す」タイプとが本来は区別されていたことを万葉集の題詞の用語の分析により指摘し、それが平安では「返し」に統一されてしまうため区別が見えなくなっていること、しかし漢文文献（古記録等）に徴すれば、平安中期まで意識の上では区別があったことが実証できることを論じた。以上、本論文は和歌によるコミュニケーションの歴史についての、包括的な初めての論考である。
審 査 委 員	（主査）　教授　浅田　徹	
	教授　古瀬　奈津子	
	准教授　松岡　智之	
	講師　藤川　玲満	
	教授　鈴木　宏子（千葉大学教育学部）	